

Contents Vol.218

2019.10.4

01 巻頭特集

- 1 植木 章三・新教育学部長インタビュー
- 2 学生食堂リニューアル
- 3 大体大PEOPLE
松平一彦・履正社高校野球部長

07 NEWS

- 1 女子水上競技部がリレーで関西記録更新
- 2 なぎなた部が演技競技で全国大会3連覇
- 3 第30回ユニバーシアードに4学生出場
- 4 陸上全日本インカレで投擲競技7人入賞
- 5 指導者セミナーで
スタンフォード大学の河田剛さん講演
- 6 毎日放送の馬野雅行アナウンサーが
ゲスト講師
- 7 ダッシュセミナーで
五輪選手の武田大作さん講演

11 EVENT

- 1 入学式 新たに713人
- 2 教育後援会役員会
- 3 臨海実習
- 4 退職教員の会が総会
- 5 学友会役員決まる
- 6 海洋スポーツ実習
- 7 キャンプ実習
- 8 オープンキャンパスで新企画
- 9 大学資金収支報告

06 コラム「ボーシャー」

14 コラム「窓」



明るく元気に、少しのいい加減さを持って、
重大な使命を全うしていける、
そんな先生をどんどん送り出していきたい

植木 章三

新教育学部長インタビュー

Ueki Shouzoh

大阪体育大学が健康福祉学部を廃止して教育学部を設立する学部再編を敢行して4年半。今春、教育学部の第1期生が社会に巣立った。同時に教育学部長が交代し、2代目には教育学部教育学科長だった植木章三教授が就任した。植木・新学部長は平成27年（2015年）4月、東北文化学園大学から本学に教育学部教授で招聘され、新設の学部を軌道に乗せるのに尽力した。学生時代はハンマー投げの選手で、本学では陸上競技部で投擲のコーチを務める。身長174㎝、体重100㎏の体格同様、おおらかに学生を見守る植木・新教育学部長。今春、予想を上回る教員合格者を輩出した教育学部の方針や、目指す教師像、自身の学生時代の思い出などを聞いた。

【インタビューー OUHSジャーナル編集長・和泉かよ子】

—4月から教育学部長に就任し、この半年いかがでしたか？

植木 教育学部は教員が7人入れ替わり、ぐっと若返りました。本学の特徴や方針を説明し、早く慣れてもらおうのが私の仕事でした。今年度からカリキュラムも少し変わりましたが、新しい人材を得て、ますます充実した活気ある学部にしようと取り組んでいるところです。

—今春卒業した教育学部の第1期生は、実に39人もが公立学校（小中学校、支援・養護学校）の専任教諭に合格するという大きな成果を出してくれましたね。

植木 本学教育学部のスタート時からかわってきた者として、この4年半の間でこれに勝る喜びはありません。何といっても第1期生ですから、うまくいくだろうかと期待と同じぐらい不安もありました。正直、専任教諭に合格するのは25人ぐらいかと予想していたので、39人合格というのはうれしい誤算でした。複数の県で合格した学生もあり、延べ人数では44人です。第1期卒業生は116人ですから3分の1が合格しているわけです。これだけ高い合格率の大学はそうないと思いますよ。

専任教諭にはなれなかったけれども、公立学校の常勤講師に就いた学生も30人近くおり、講師をしながら専任教諭を目指します。目標達成意識の高い学生たちなので、きつとあきらめずに専任教諭への階段を上ってくれると思います。この春は大阪府教育委員会で「大体大旋風が吹いた」と話題になったと聞いています。初めて教員就職戦線に登場して、いきなりこの結果ですから、教育委員会もさぞかしびっくりしたでしょう。学生たちの頑張りに私も鼻が高いですよ（笑）。

――「ずばり、これだけ高い合格率の秘訣は何ですか？」

植木 教育学部の教員は教育委員会や公立学校から来た人が多く、教育現場を熟知している教員が学生にしっかりと寄り添ってまめに対応してくれたのが大きかったと思っています。採用試験対策もかなり綿密にやってみようことができました。本学教育学部の方針は「少人数精鋭」です。100人ちょっとの学生に20数人の教員という布陣ですから、教員には学生一人ひとりがよく見えるんですね。学生はそれぞれに得意科目、苦手科目がある。十把ひとからげではなく、学生の学力レベルを踏まえたきめ細かい指導ができたということが、今春の結果でしょう。それに、教育学部に入学してくる学生たちは「体育の先生になる」「小学校の先生になる」と目標がはっきりしているの、少々、厳しい指導にもへこたれずにちゃんとついて来るんですね。

――植木先生も学生時代は学校教員を目指していたのですか？

植木 いやあ、そういう明確な目標もなく、もっぱらクラブ活動の陸上競技に明け暮れていました。高校1年の時、ハンマー投げをやっていた先生が赴任してきて、私の所属していた陸上競技部の顧問になったんです。私は短距離をやろうと思っていたんですけど、この体形に目を付けられました。子供の頃からいわゆる肥満児でしたから（笑）。顧問の先生から「お前、ハンマー投げやってみないか」って薦められて、結果的にのめり込んだんじゃないか。投擲競技って技術が難しく、タイミングをつかむのに考えることがいっぱいあるんです。それが「研究」につながっていくんですよ。高校で止めることができなくなると、もっとハンマー投げを研究しようと投擲競技が強かった筑波大学に進学することになりました。

――「自身はどのような大学時代を過ごされたのでしょうか？」

植木 大学でもハンマー投げ中心の生活でした。住まいは陸上競技部の合宿所に入所したんですが、最初の説明では1人部屋だったのに、いざ行ってみたら「部屋が足りなくなった」って6畳一間に男2人押し込まれたんです。もう1人は十種競技の選手だったんですが、185^{cm}、95^{kg}の巨体ですよ。私も90^{kg}以上あったし、とにかく部屋が狭かった。よくまあ、あのコンビニで丸一年6畳一間で生活できたものだと思います。彼は2年生になって合宿所を退所して一人暮らしを始めたので、私もその後は6畳を1人で使えるようになりました。

この合宿所では料理も覚えました。寮母さんみたいな人もおらず、入所している学生が順番で食事当番をするんです。みんな見よう見まねの料理ですよ。郷里の母親から「あんたいったい何を作ってるの!？」って聞かれましたね。

こんな相撲部屋みたいな生活でしたが、勉強もやりましたよ。とても宿題が多くて、陸上の練習が終わった後、部屋で深夜1時ごろまで宿題をやっていました。勉強は「やらなきゃいけないものだ」って意識が強かったですね。そのうち大学の教員になるうって気になって、大学院に進みました。そういう進路を選んだ結果、今ここでこうしているわけなんです。大学時代のルームメイトは卒業後、堺市の高校の先生になって、今、大阪陸上競技協会の強化委員長です。茨城の狭い部屋で青春を共にした仲間が、30年以上経って、同じ大阪にいるというのは人の縁とは本当に不思議なものです。

共同生活って楽しいこともいっぱいありますが、やっぱりストレスも多い。そういう中で我慢するということの大切さを学びました。嫌なことがあってもキレたりヤケクソになつたりしないのは、学生時代に身に着けた忍耐力のお陰、同居していた部屋の

相棒のお陰かもしれません（笑）。

――大学、大学院では衛生学を専攻され、本学では教授として公衆衛生学などの教鞭を取っておられますが、なぜこの専攻を選ばれたのですか？

植木 私が高校まで過ごした郷里は新潟県上越市というところなんですが、火山が三つ見えるんです。2000^m級の山が三つも並んでいる実に壮観な眺めでして、人口10万人以上の都市でこんなところは他にないと地理の先生がよく言っていました。雄大な自然に囲まれて育ったせいも、高校の授業では地学が好きでした。自分でも火山や地震について調べたり、天気図を描いたりしていました。その延長で気圧や温度、湿度などの自然が人間の生活にどう影響を与えるのか勉強しようと思ったんです。

――スポーツ、勉強、相撲部屋のような共同生活と、とても多くを学んだ学生時代を過ごされたんですね



(笑)。大阪体育大学教育学部のトップとして、学校教員として社会に出ていく学生たちに求める教師像はどのようなものでしょう？

植木 明るくて元気のいい先生です。私は東北地方の大学の勤務が長くて、4年半前に仙台の大学から本学に来たのですが、びっくりしたのは学生の声がいかにデカイことです。東北の学生の1.5倍は音量ありますね。この子ら、きつとひそひそ話なんてできないんだらうなって思ったり(笑)。そしてまた、そのデカイ声で自己主張の強いこと。でもこれらは、学校教員としてはいい資質だと思うんです。あけっぴろげで隠し事ができない性格、大きな声ではっきりものを言う先生がいたら、学校が明るくなるような気がしませんか？ それに、本学は体育大学ですから、入学してくる学生たちはだいたい体育が得意です。今春、公立学校の専任教諭に合格した39人のうち29人は小学校教諭なんです。動き盛りの子供たちを動き負けずしつかり受け止めてくれると思います。

それと、精神面では柔軟性のある教員です。教育とは人間が相手。予期せぬことが起こることもあるし、理不尽なことだってあるでしょう。子供だって心身ともに元気な子たちばかりじゃない、病気や障害のある子もいれば、心に悩みを持った子供だっています。モンスタークレーマーの保護者がいるかもしれない。解決しなければならぬ課題が発生した時、教員はまず自分が矢面に立つ覚悟を持たなければいけません。一方で、「こうでなければいけない」と杓子定規に考えるのではなく、ある意味ちよつといい加減な部分を持つて柔軟に対応できる先生であってほしい。教育現場で起こる問題ってさつさと解決できるものばかりではなく、むしろ時間がかかるうえに完璧には解決できないものの方が多い。教育現場にスーパーマンの出番はないんですよ。あせらず少しずつ前に進める、一歩踏み込んで子供

の話聞いてあげられる、そんな地道なことを、あまり思い詰めにちよつといい加減にやっていける人材が求められているのではないかと思います。

——今春、公立学校の専任教諭になった39人の中には、ハンディキャップのある子供たちの支援学校(養護学校)に就職した学生が8人いますね。本学教育学部はこうした子供たち向けの教員養成にも力を入れているんですか？

植木 教育学部では二つの免許を取得できるようにしています。中学・高校の保健体育教員を目指す保健体育教育コースと、小学校教員を目指す小学校教育コースのどちらでも、合わせて特別支援学校教諭の免許を取ることができます。これは支援学校教諭の免許取得に必要な勉強をすることが、どんな学校に赴任しても役に立つからです。ハンディのある子供を一般の学校に行かせるか、特別支援学校に行かせるかは保護者の判断です。一般の小学校の教諭になったからハンディのある子供に関する知識は必要なのではなく、普通学級にも送った子供たちはいるんです。

特に昨今、注目されている発達障害の子供たちは、普通学級に通っていることが多い。他の子供と違っていないとか、そういう事態に、昔は先生が「しつけ」と称して力づくで椅子に座らせていたのではありません。研究が進んできた今では発達障害はしつけで治るものではないと分かっています。どういう障害なのか分かったうえで、子供が楽しく学校生活を送り、学習できる環境を作ってあげなくてははいけません。支援学校教諭の免許があれば障害に関する知識もあるので、言うことを聞かない子供にパニックになつたりせず、自信を持つて対応できるはずですよ。



集団教育の現場では、教員と子供は1対多の関係です。でも教員は子供一人ひとりを見て各自に必要な指導をしなくてはならない。とても難しい仕事なのですが、先生が思い詰めてピリピリしていたら子供たちも伸び伸びできませんよ。明るく元気に、少しのいい加減さを持つて、重大な使命を全うしている、そんな先生を本学の教育学部からどんどん送り出していきたいです

植木章三 (うえき・しょうぞう)

1961年10月25日生、57歳。

新潟県上越市出身。1984年3月、筑波大学(体育専門学群)卒業。1986年3月、筑波大学大学院修士課程(体育研究科健康教育学専攻)修了。1999年3月、愛媛大学大学院博士課程(医学系研究科機能系化学病理専攻)修了。2005年4月、東北文化学園大学医療福祉学部保健福祉学科、教授就任。2015年4月、大阪体育大学教育学部教育学科、教授就任。2019年4月、同大教育学部長就任。忙しい合間の気晴らしは「陸上競技場で投擲競技を眺めていること」。時代劇の映画が好きで、中でも勝新太郎の座頭市シリーズのファン。「天才的な殺陣の腕を持つヒーローが障がい者というところがいい」

食堂リニューアル

混雑解消、新メニューも



アスリートは食べるのもトレーニング！ 数年前から検討を開始した学生食堂のリニューアルがこの春、ついに工事を完了した。座席数は167席から305席に大幅に増え、明るくゆったりした空間に。学生から改善要望が大きかったかつての混雑ぶりは解消した。新メニューも加わって、学生たちの食生活を支える役割もパワーアップ。

混雑解消には、座席数を増やしただけでなく、レジを廃止して券売機で食券を買うシステムに変更。食事を受け取ってから、現金を扱わないで済むようになり、レジ前の行列は無くなった。食事を提供するカウンターもぐっと広がり、「麺類」「カレー・丼もの」など料理の種類によって提供場所を区分け。食事を受け取る際の動線がすっきりと整い、これも混雑解消につながっている。

また、厨房機器も更新。水蒸気と熱風で、焼く、煮る、揚げる、蒸す、などの多様な調理をこなすスチームコンベクションオーブンと、出来上がった料理の風味を損なわずに急速冷却するブラストチラーの導入によって、調理の効率が格段に上がった。そのため、レギュラーメニューを増やせるようになり、定番のカレーや麺類に加え、牛ステーキ、お好み焼き、ミートスパゲティが登場。タンパク質をしっかり取りつつ栄養のバランスを考えた「アスリート食」「ロコベジ丼」など体育大学ならではのオリジナルメニューもある。

食堂内にあった売店は移設し、食堂に入らなくても外から商品を買って求められる「エナジーカフェ」に一新。クラブ活動が終わった後の栄養補給にも対応できるようになった。食べ物は、サイズ大き目のおにぎり、ごぼうサラダサンド、マフィンサンドなどテイクアウトに適したもの。ドリンクでは定番のコーヒーのほか、グリーンミックスジュース、キャロットミックスジュースという野菜入りジュースがある。

リニューアルによって厨房の衛生面も向上し、内装が新しくなって見た目にも清潔感が出た。オープンキャンパスのイベントで久しぶりに大学に足を運んだ卒業生たちは、「食堂がきれいになっている！」と目を見張っていた。

今後は食堂の建物内にあるトイレを外側に移設して、さらに食堂スペースを拡張する計画だ。

営業時間

〔学生食堂〕

平日 8:00～16:00
土曜 8:00～15:00
日・祝 10:00～15:00

〔エナジーカフェ〕

平日 8:00～19:30
土曜 8:00～15:00
日・祝 休み

第101回 全国高校野球選手権大会で 初優勝



松平一彦（まつだいら・かずひこ）
1977年6月22日生。大阪体育大学体育学部卒、
32期生。妻と1男1女。「妻も大阪体育大学の
卒業生。息子は野球をやっています」



履正社高校 野球部長 松平一彦さん

「ちょうどチームの調子が上がってきたところに、甲子園という大舞台があった。こういうプレーをしようってみんなで決めたことを、全員がきちんとこなせた結果が優勝につながりました」

今夏、第101回全国高校野球選手権大会で初優勝した履正社高校（大阪府豊中市）の松平一彦・野球部長は、快挙についてこう語った。練習試合中の野球部グラウンド（大阪府茨木市）に松平部長を訪ねたのは、歓喜の初優勝から10日後。

まだ興奮が続いているかと思えば、「今日も3年生の部員にこれだから大事だぞ、って言ったんです。野球だけじゃなく、勉強も生活態度も、優勝校の生徒にふさわしい高校生活を送るようになって」と浮かれている様子は全くない。むしろ「優勝で学校への注目が高まったので、社会的責任が大きくなった」と襟を正している。

「部長」と聞くと、背広を着た管理職のイメージだが、履正社高野球部のグラウンドには毎日、ユニホーム姿の松平部長がいる。岡田龍生監督とともに直接、部員の指導に当たる野球部長だ。

2000年3月に大阪体育大学を卒業し、履正社高に保健体育の非常勤講師として就職。授業がない日も野球部の指導は休まなかった。当時の履正社高は、1997年夏に甲子園に初出場した影響で野球部員がどんどん増えて100人規模に。「監督1人でみる人数を超えてしまい、学校は監督を手伝う人材を探していたところ、大阪体育大の野球部にいた僕がタイミング良くはまったというわけで、幸運でしたよ」と巡り合わせに感謝する。

その翌年、常勤講師となり野球部長に就任した。「野球部の体罰が外部からの指摘で表面化したんです。野球部長が半年の謹慎の末に交代して、僕に部長ポストのお鉢が回ってきた。私なんかも鉄拳で育てられた世代ですけど、教員になってからは一転、体罰排除の潮流の中で仕事をしてきました。今の高校生たちに体罰なんて通用しませんよ。しっかり話をする、ためにコミュニケーションを取るのが大事です」

部員と話をするのも、監督から言った方がいいのか、自分が言った方がいいのか、状況に応じてきめ細かく監督と役割分担するという。

自身も小学生の時から野球に打ち込み、兵庫県の神港学園高校に進学、野球部では甲子園を経験した。大阪体育大学の野球部では4年の時にマネジャーになり、「この経験がその後の私の人生を支えてくれたと言っている」と話す。監督と相談しながら練習メニューを作り、練習試合の計画を立て、選手には生活面での指導も行うというまさにチーム運営をマネジャーという役割だった。

「監督からはキャプテンと同等かそれ以上ぐらいの位置に置いてもらって、それはもう責任重大でした」と言い、「運営が甘くて監督から指摘されたこともあるし、決して完璧なマネジャーではなかったんですが、あの経験があればこそ、高校教員になってからも、不安を感じずに野球部のマネジメントをすることができた」と大學生生活を振り返る。マネジャー業務は3年生の時から手伝っていたが、当時、4



コラム ボーシヤ

名誉教授 和田隆夫

めぐりあう時間たち

大阪市西区の鞆公園まわりには洒落たカフェがたくさんある。今回は、その一軒のスケッチである。

そのカフェには鞆公園に接する裏庭がある。このため雨が降らないかぎりたとえ店内席が空いていても、とうぜん外でしょう。それが不思議と店内席からいっぱいになる。この現象はぼくにはありがたい。公園と融合して森の中にあるような庭に待たずに着席できるからである。

ある日、ぼくはカフェラテとパインタルト、妻は台湾スイーツの豆ナンチャラでお茶をしていた。

テーブルは、余裕ある6席の大きなもので、インド綿の生地に葉と花卉のデザインをウッドブロックプリントした黄と赤と青の印象的なテーブルクロスでおおわれ、その真ん中にアラブ風ガラスランタンがポツンと置かれている。音楽はながれない。ガーデンの佇まいは公園の草木にとけ込み、とてもイカしている。

少しして若いお母さんと小さな少年のカップルと相席になった。

ぼくはジョー・ウォルトンの「図書室の魔法」(創元SF文庫)、妻はアガサ・クリスティーの「春にして君を離れ」(ハヤカワ文庫)を読みだしていた。ぼくの本は、15歳の本好き少女が主人公だ。心に傷を負った少女の秘密の日記が描く青春の日々。そこに散りばめられるSF小説の名作の数々! SFファンにはたまらない幻想小説である。

でも相席の二人の会話がおもしろくて読書がすすまない。お母さんは、ぼくのタルトを見て、店内のケースに整列するケーキを見たくてしかたがない。小さな恋人は「行かないで」とダメ出しをして、その攻防戦となっている。

隣席のカップルはワインを飲みゆったりとした時間に身を置いている。反対の隣席は20代の4人娘が嫌みのない賑やかな時間を愉しんでいる。雀が舞い降り、少し冷たい風がオリーブの葉を揺らしてぼくたちのテーブルを吹き抜けていく。自然はくつろいだ時間のなかで変化している。

同じ空間で違う時間がめぐりあう。違う質感の中でぼくたちはそれぞれ生きている。つまりそれはめぐりあう時間の数だけ世界はあり、その世界が交錯する。世界の複数性のなかでぼくたちは生きていくのだ。



年生には、後に巨人軍や大リーグで活躍する上原浩治さんがおり、「マスコミやプロ野球団のスカウトも来るし、それらの対応などもして、普通の大学生では経験できないことをさせてもらいました」。

松平部長が履正社高に赴任してからの19年で、野球部は春のセンバツに8回出場し、うち2回は準優勝したが、夏の甲子園は3回出場したうち2016年に3回戦まで進んだのが最高だった。

優勝した今夏の履正社は過去最強集団だったのかと云えば、松平部長は「そうではないですよ、甲子園に行くからには毎回、優勝を目指していますから」と淡々と云う。今夏の履正社チームは打撃力を武器に勝ち進み、深紅の優勝旗を勝ち取

った。松平部長は「うちのチームはみんなで戦い方を決めるんです。こういう球は狙って打っていいこう、こういう球は見逃していいこうとか、かなり細かく打ち合わせをする。でも、実際に試合になると、やっぱり打ち合わせ通りにできないことも多い。そりゃ緊張もするし、人間だから仕方ないんだけど、この夏のチームは高い確率で決めた通りのプレーができた。それが勝因です」と分析。

この冷静さはどこから来るのだろうか?



「僕も高校生の時に甲子園に行きましたが、甲子園球児になるとマスコミも取り上げるし、ある意味チャホヤされる。でも本質はたかが一高校生ですよ。たまたま甲子園に出たことで世間から持ち上げられて、自分はすごい人間だと勘違いしたら、その後は『あの時は良かった』って思い出にすぎない。人生になってしまう。僕は教えるためにそうはなってほしくない。甲子園優勝で燃え尽きたらアカンのです。いくつになっても、どんな職業に就いても、自分が成長するために努力する人間であってほしい」

甲子園で全国制覇を成し遂げたという

不動の実績も、松平部長は「高校生にとっては、長い人生の初めのうちに遭遇した通過点です」とし、「学校教育の役割は、生徒たちが自立した人間として社会に巣立っていきけるようにすること。野球はそのきっかけの一つに過ぎません」と述べた。

どんな時も奢らず、謙虚に――松平部長の人生観、教育者としての信念が伝わってきた。最後に「野球のどこが好きなのか」と聞くと、「え? うーん、子どもの時から普通にずっとやってきたのが野球ですからねえ……。改めてそう聞かれるのが印象的だった。」

【OUHSジャーナル編集長 和泉かよ子】

関西記録を塗り替えた
丹下（後列右）、雑賀（同左）、
河岸（前列右）、新山（同左）



女子水上競技部

200メートルリレーで 関西記録を更新



浅野晃平コーチ

兵庫県尼崎市で6月16日に行われた「関西学生夏季公認記録会」で、大阪体育大学の女子水上競技部が、「200メートルフリーリレー」（50メートル×4）の関西記録を更新した。タイムは1分43秒10。浅野晃平コーチは「絶対に記録を塗り替えてやるという4人の強い気持ちの結果につながった。2年前にコーチに就任して以来、一番うれしかった出来事です」と選手らを称える。

記録更新したリレーメンバーは、いずれも体育学部4年生の丹下明希、3年生の雑賀陸希、1年生の河岸凜子と新山くるみ。浅野コーチが思い切った起用した1年生2人は「ものすごく緊張した」と声を揃えるが、プレッシャーを乗り越えて期待に応えた。更新前の関西記録も大体大の女子水上競技部が作ったもので、浅野コー

チは「最強メンバー」と言われた4人の記録を後進が刷新するって素晴らしい」と満面の笑みだ。丹下は高身長を生かした大きい泳ぎで200メートルをメインにしており、リレー

の50メートルは「何も考えずがむしゃらに泳ぎました」と明かす。雑賀は「私は軸がぶれやすく、手で水をかいたときに下半身が揺れてしまう。その弱点を克服するトレーニングに集中したのが良かった」と分析する。

1年の河岸と新山は現在、いい意味でライバル関係にあり、切磋琢磨して成長している。河岸は「水に飛び込んでから浮き上がるまでの動きは得意なんです。通用するのは25メートルまで。ターンの後の泳ぎで追い抜かれてしまうので、どうすればテンポを落とさずに泳げるかと、前半のペースを抑えて後半に負けないようにできないかとか、自分なりに試している」と話す。新山は「私は持久力がなくて、練習でも後半になるとぼてしてしまう。先輩たちに食らいつこうとそれだけの気持ちで頑張っていたら、タイムが速くなってきた」と泳ぐのが面白くなってきた。

リーダーの丹下は今夏でクラブ活動は引退する。卒業後は出身地の愛媛県で警察本部に就職予定だ。警察官の仕事は心身ともにタフでなければ務まらないが、丹下は「水泳をやっている自分をしんどい状況に置くのは慣れました。むしろ、しんどいことがないと物足りないくらいです」と頼もしくコメントした。

なぎなた部

演技競技で全国大会3連覇

主将の福岡歩はすべてに出場

8月11日に埼玉

県入間市で行われた「第58回全日本学生なぎなた選手権大会」で、大阪体育大学は2人ベアの演技競技で優勝。演技競技は大会3連覇を果たした。なぎなた部主将の福岡歩（体育4年）は、優勝した3大会にすべて出場した3連覇の立役者だ。



福岡歩（体育4年）

福岡は両親とも大阪体育大の出身で、父はラグビー部、母はなぎなた部。母親の影響で小学1年からなぎなたを始めた。「最初のうちは技ができるようになると面白く、技を覚えていくのが精度、美しさを磨いていく奥の深さがある」と魅力を語る。

全日本学生なぎなた選手権の演技競技は、ベアの呼吸が合っていることが重要だ。福岡は2、3年生の時は1年先輩の仕入愛梨と組んで優勝し、今年も1年後輩の大仲麻友（同3年）と組んだ。「昨年と一昨年は仕入先輩の演技についていくので頭

がいっぱいだった。今年自分がか先輩なので、引っ張っていかなければと考えました」と言い、「仕入先輩はとても技が正確で美しい演技をする人、今年ベアを組んだ大仲は打突力が強く粗削りなパワーがある。全くタイプの違う相手と上手く合わせられて3連覇につながった」。

奈良市内の自宅から片道2時間かけて大学に通うハードな生活で、部活も休まず続けてきたが、「ここぞという場面で力を出せないプレッシャーに弱いところが、なぎなたによって少し克服できてきたかな」と感じている。学生生活もそろそろ終わりを迎えようとしている。「卒業後は地域の道場に通うつもりです」とまだまだ鍛錬は続く。



女子サッカー部
今田怜那 (体育4年)

陸上競技部やり投げ
坂本達哉 (大学院1年)



男子サッカー部
田中駿汰 (体育4年)

男子サッカー部
林大地 (体育4年)



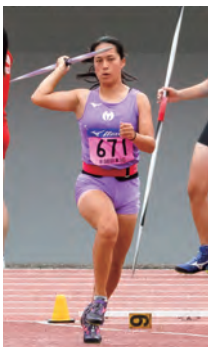
イタリアのナポリで7月に開催された第30回ユニバーシアード競技大会に、大阪体育大学からは学生4人が日本代表として出場した。指導者としては、栗山佳也・体育学部教授が陸上競技チームリーダー、宮地弘太郎・体育学部教授がテニス部監督、生田秀和・体育学部准教授が柔道男子コーチとして参加した。

ユニバーシアード 4学生が出場

「ナポリでは得点を挙げたい」と宣言していた通りにシュートを決めて1得点した。今田はグループリーグから準々決勝、準決勝、決勝とすべての試合に出場し、チームの準優勝に貢献した。やり投げは予選で12位までが決勝に進めるが、坂本は予選13位で惜しくも決勝進出を逃した。

陸上競技部は、全日本インカレ29人出場、投擲競技で7人入賞を達成した。天皇賜杯第88回日本学生陸上競技対校選手権(全日本インカレ)が9月12日～15日、岐阜市の岐阜メモリアルセンター長良川競技場で行われ、大阪体育大学からは29人の学生が出場し、7人が入賞(8位以内)した。投擲競技を中心に活躍した。

栗山佳也部長は「陸上の全日本インカレはここ数年、標準記録が上昇しているうえ、大会出場者も1種目30人平均に絞られ、出場資格が厳しくなっている。その中で、大阪体育大から29人も出場できたのは喜ばしい限り。坂本君を筆頭に7人が入賞できたのは、陸上部選手諸君の日頃の努力の賜物」と選手らを称えた。坂本は「最後の最後に逆転されて優勝できなかったのは残念ですが、来年の東京オリンピックを目指し、ますます頑張ります」と話した。



武本紗栄 (体育2年)



石坂力成 (体育4年)



吉野健太郎 (大学院2年)



青柳栞 (体育3年)

陸上競技部 全日本インカレ29人出場 投擲競技で7人入賞

Seminar

学生アスリートの未来を 大事にする指導者であれ

河田剛さん



大学スポーツのガバナンス確保やコンプライアンスの向上を目指し、大阪体育大学では昨年「指導者セミナー」を実施しており、今年度の第1回は7月18日、「日本の大学スポーツはアメリカからどう見えるのか」と題し、米スタン



フォード大学でアメリカンフットボールのコーチを務める河田剛さんを講師に開催された。河田さんは2007年に渡米し、2011年からスタンフォード大で正式にアメフト部コーチに就任。NFL(米プロフットボールリーグ)にも精通している。講演には教職員だけでなく、スポーツ指導者を目指す学生ら100人以上が集まった。アメリカにおける大学スポーツの現場を知る河田さんは、若者の潜在的な可能性の芽を摘んでしまうような「練習漬け」の指導を真っ向から否定。「日本では子供を学校にも行かせず通信教育で代用し、1日中、競技に取り組ませるような指導をしている所もあるが、これは児童虐待に近い」とし、「若い人たちは将来がある。社会に巣立つていくためには、家族や友人と過

ごす時間も大切だし、勉強しなければいけない。そうした時間を奪って、競技に没頭させなくては強くなる、上手くならないというのは、指導者の力量不足に過ぎない」と断言した。スポーツ界では「アスリートファースト」という言葉が使われるが、河田さんは「大学生も含めて学校でのスポーツは、アスリートファーストであるべき。アスリートの未来を考えた指導が何よりも大切」と述べた。アメリカでは大学ス



ポーツがビジネスとしても成り立っており、収益は大学スポーツの発展に寄与している。河田さんは「合理的な判断の積み重ねによって、スポーツにお金が回る仕組みが出来上がった」と指摘。日本の大学スポーツ界が取り入れるべき考え方や、指導のモデルがアメリカにはあるとした。質疑応答では、学生と教員から「体を大きくするのは何を食えばいいか」「渡米したいと思っているが、どういう準備をす

ればいいか」など活発に質問が飛び出した。

河田剛さんのメッセージ

一つの事、一つの能力だけを伸ばす指導者から、一人ひとりの将来を見据え、広い選択肢を与えた上で、アスリートとしての能力と一人の人間としての能力を伸ばす指導者へ。

スポーツメディア論でゲスト講師

毎日放送アナウンサー 馬野雅行さん

体育学部のスポーツメディア論の授業で、毎日放送のアナウンサー、馬野雅行さんがゲスト講師で登場した。馬野さんはプロ野球の阪神・巨人戦をはじめプロからアマチュアまで多種多様なスポーツ報道をこなし、スポーツ中継では関西屈指の名アナウンサー。テレビやラジオの中継放送をするにあたって、どんな準備をしているのかなど隠れた努力を披露した講義に、学生らは大いに刺激を受けた。



Seminar

現役生活30年、 まだオールは手放さない

ボート選手 武田大作さん



1人でも多くのスポーツ人財を世に送り出すのを目指し、大阪体育大学が展開する「ダッシュプロジェクト」の一つがセミナーの開催だ。令和元年初のダッシュセミナーは6月23日、大阪市北区の同窓会館アネックスで、5回のオリンピック出場経

験のあるボート選手、武田大作さんの講演会が開催された。46歳の武田さんは、約30年も第一線で選手を続ける。大体大漕艇部の部員や地元の高校生らボートに勤しむ若者約40人が参加し、大ベテランの話に聞き入った。

武田さんは愛媛県のみかん農家出身で、愛媛大学農学部付属高校に進学した。子供のころから山を上がり下りしてミカンの栽培や収穫を手伝ったため、「すっかりO脚になってしまった」と左右に開いた両足を披露して笑いを誘った。高校でボ

ト部に入り3年の時にインターハイで5位に。以降、今も現役のボート選手だ。数あるスポーツの中からボート競技を選んだのは「野球やサッカーなど球技がとにかく苦手。30年前は日本ではまだボートは珍しく、他の人がやっていないことをやろうと思った」と明かした。

30年も現役でいられるのは「農業は種をまいて収穫まで時間がかかる。ミカン農家の生活が染みついている、コソコソと地味に努力するのが得意」と。オリンピックは2000年のシドニー、2004年のアテネではいずれも6位。2008年の北京は「メダルを取って引退しよう」と臨んだが、大気汚染で体調が悪化してまさかの13位。シヨックよりも「ここでやめてたまるか」と五輪メダルへの執念は強くなった。

ボート界のレジェンドと言われるが、「レジェンドって好きじゃない。もう死んでしまった人みたいで」と胸の内を話し、来年の東京オリンピック出場を目指してまだオールは手放さないと宣言。「スポーツは人生そのもの。成功もあれば挫折もある。スポーツは結果がすべてになったら楽しくない。上手くなる、強くなる楽しさを感じるのがスポーツの醍醐味」と若者たちにメッセージを送った。

馬野さんは1989年に毎日放送に入社。プロ野球を担当することになり、当時は親子ほどの離れた監督の取材に苦労する一方で、まだ話題性のない同年代の選手たちと信頼関係を築こうと心掛けた。「最初のうちはこの若手が将来は球団の監督になったりしたら、自分の仕事に大いに役立つだろうという気持ちだった。でも付き合ううちに人間として好きになり、将来、大物になるかどうかはいつでもよくなった」と心境を明かした。

プロ野球のナイターは午後6時から始まるが、馬野さんは朝6時に起きて準備する。球団や選手の記録はすべて手書きでノートに書き留めており、講義ではびっしり数字が並ぶ自筆ノートを公開した。「ホームラン、ヒット、盗塁など野球には様々な記録がある。今日の試合で何が起これば新記録なのか、そういうニュース性に注意しておき、達成したらアナウンスする」と言い、そのためには日ごろから情報を整理して蓄積しておくのが不可欠だと述べた。試合前の練習の時間に選手に取材するが、「選手は試合に向けて集中力を高めるやり方がそれぞれあって、練習前の取材はダメな選手もいるし、練習の後はダメという選手もいる。ペースを乱

さないよう取材するのはなかなか骨が折れる」とも。

最後には「アナウンサーの仕事はとても楽しい。自分が好きなことをして給料がもらえる。こんな幸せなことはない。皆さんもそんな仕事を見つけて頑張ってください」とこれから社会に出る学生たちを激励した。



平成31年度の入学式が4月2日、スターゲイトホテル関西エアポートの国際会議場で行われた。大学院19人、体育学部558人、教育学部136人、計713人の入学が許可された。

式辞で岩上安孝学長は、大学院生には「他の研究領域との関連性を常に念頭にマクロ的な広い視野に立って自らの研究を深めてください」と述べた。学部生に向けては「スポーツの多面的な意義を学び、理解を深めるとともに、教養を広げ、体育、スポーツ、教育に関する専門知識を習得してください。皆さんが学部学問領域は、理論と実践を相俟いながら相互に補完しつつ、教室で学んだ理論を具体的場で検証していく姿勢が大切です。切磋琢磨しながらの運動部活動、四季折々の中での野外活動、様々なボランティア活動などを通じて、視野を広げ、成長するきっかけをつかんでください」とし、来年は東京オリンピック、パラリンピックが開催されることから「今年は50を超える競技ごとのテストイベントをはじめ、ラグビーワールドカップ、女子ハンドボール世界選手権などが予定されています。刺激を吸収できるまたないチャンスのある年。悔いのない学生生活を送ってください」と激励した。

入学式 新たに713人

野田賢治理事長は「浪商学園の伝統を受け継ぎ、大体大生としての自覚を持って研鑽を積んでください。体育、スポーツのフロンティアを目指して勉学に励んでいただきたいと思えます。皆さんの健闘を心から祈ります」とあいさつした。

地元の熊取町を代表し、藤原敏司町長が「貴学の建学の精神である不断の努力により、智徳、体を修め、将来、スポーツや教育、健康の分野で活躍されますとともに、豊かな人間力に身に着けてください。本町との交流、連携の機会を積極的に持っていたらととともに、在学中にこの熊取町を将来、住んでみたい町として実感していただければ幸いです」と祝辞を述べた。入学生の宣誓では、まず大学院生を代表し、岡幸典さんが「スポーツ科学を支える科学的根拠に基づく実践への必要性は

日々、増していくばかりで、その一端を担うために始まる研究生活には身が引き締まる思いです。スポーツを通して健康的で明るい社会を作る一助となるよう専門分野のより深い知識を学び発展させていけるよう精進します」と誓った。続いて、体育学部を代表し鴻村樹さんが「スポーツを通して多くの人々に感謝と勇気を与え、豊かな人間力を身に付け、何事にも自ら挑戦する人間になれるよう努力することを誓います」と力強く述べ、教育学部代表の藤原香さんは「子供たちに社会性や仲間の大切さを伝え、心に寄り添える指導者を目指し、積極的に教育学を学びます」と宣言した。



教育後援会役員会

令和元年度の大阪体育大学教育後援会役員会が7月20日、本学中央棟大会議室で開かれた。学生の保護者25人と野田賢治理事長、岩上安孝学長をはじめ大学幹部が出席し、昨年度の事業、決算報告などのほか、学生の教育内容についても活発な意見交換が行われた。

役員会では冒頭、野田理事長が、2021年の学校法人浪商学園創立100周年に向け、「返済不要な給付奨学金制度を始め準備をしている」とし、教育無償化の流れをとらえて優秀な人材には法人として経済的サポートをする方針を述べた。岩上学長は「少子化で教員採用が減少する中、この3月に卒業した教育学部の1期生は延べ40人以上が現役合格し、いい結果でスタートを切った。この勢いを今年度につなげていきたい」と学生たちの健闘を称え、寺野雅之・教職支援センター長は「学年が上がるに連れて、狭き門であることが分かって教職をあきらめる学生も多いので、早いうちから係わるようにしたい」と学生に夢を失わせない対応策を述べた。

新役員の出選では、棚村千鶴



会長が退任して、辻本智子副会長が新会長に決まった。教育後援会は年約3380万円の会費から、学生のクラブ活動や食事、クラブ活動中に行がをした学生の治療、海外の競技大会に出場する費用などを助成している。大学側からはクラブ活動での学生の活躍ぶりが報告され、温かい支援に対する感謝の言葉が述べられた。

◇新役員は次の通り◇

▽会長 辻本智子

▽副会長 渡邊樹世子

▽会計監査 佐川弘美

大田政信

令和時代初めの臨海実習



令和時代初の野外活動実習は、臨海実習が7月1日(月)～5日(金)和歌山県白浜町白良浜海水浴場において実施した。

臨海実習は定員60名(体育学部3回生配当)で開講しているが、今年度の履修者は、学科別ではスポーツ教育学科41名、健康スポーツマネジメント学科15名、男女別では男性42名、女性14名で、登録後に参加取り消しをした学生がいたため56名であった。

臨海実習はライフセービング、ダイビング、遠泳の大きく分けて三つのプログラムから成り、この実習内容となつて3年目を迎える。いずれも風と雨をはじめとする気象に大きく左右されるが、今年度はこれまでで最も条件が良く、初めて海浜でのプログラムを計画通りに行えた。

実習1日目は、開講式の後、班に分かれて水慣れ、初歩の泳ぎ及び遠泳のための隊列練習を行った。海で泳ぐのは生まれて初めてという不安顔の学生もいたが、授業が始まると体大生らしく、学生同士声を掛け合いながら前向きに取り組んでいた。

実習2～4日目は、ダイビングとライフセービングを1日半ずつ交互に行った。ダイビングの初回は学生の目の色が違う。命に係わるという危機感からかインストラクターの説明を集中

して聞いている姿は臨海実習ならではの姿である。ライフセービングにおいても、海の怖さと命の大切さ、救助に必要な基本技術を真剣な面持ちで学んだ。その取り組みの成果で、PADISクーバダイバーとウォーターセイフティの資格を実習生全員、手にすることができた。

特に泳力に自信のない学生にとって心配の種である遠泳は最終日に行われる。出発前、学生らは円陣を組み掛け声をかけて、全員完泳という目標に向かって実習生の心が一つになり、隊列を組んで白良浜を午前9時半に出発した。途中「え〜んやこ〜ら〜」の掛け声にも後押しされ、45分間の遠泳を全員が無事に完泳した。遠泳は、1人ではできない、困難なことも仲間と一緒にできるという気持ちでプログラムでなく、野外実習は学内だけでは得られない経験のできる貴重な機会である。学生には、是非多くの実習に参加してほしい。

【実習副主任 池島明子】

学友会

◆新役員は次の通り◆

今年度の学生代表者総会が6月4日行われ、学友会の新役員が決まった。

会長 内山智貴(教育3年) フィールドホッケー部▽副会長 佐々木紅音(教育3年) 軟式野球部、白石明日香(教育2年) フィールドホッケー部▽総務委員 續佳那子(教育2年)▽会計委員 春木都美(教育3年) ラクロス部、小西連太郎(教育2年)▽企画広報委員 原田敦生(体育3年) サッカー部、菓子瑞季(教育2年) 幼児体育研究同好会

退職教員の会 総会・懇親会

会長に増原名誉教授、3期目に



第5回大分大学退職教員の会(大体大RAT)の総会・懇親会が6月8日、大阪市内のホテルに31人が出席して開かれた。総会で平成30年度事業報告、収支決算報告、令和元年の事業計画などが原案通りに決まり、互選で増原光彦名誉教授が会長(3期目)に決まった。任期は令和4年3月31日まで。

懇親会では来賓の岩上安孝学長が、今春卒業した教育学部第1期生が教育採用試験で大健闘したことなど、大学の現況を話し、少子化が進む中、RAT会員の協力を求めた。

金子公宥名誉教授が、子規顕彰全国短歌大会で、特選2首、入選の3首を受賞、特選のうち1首は、愛知県知事賞も併せて受賞したこと、荒木雅信名誉教授(現日本福祉大学教授)が、パラアスリート国際競技力の向上を目的とした科学サポートに参画するなど、体制の構築と充実に尽力したとして、ミズノスポーツメントール賞を受賞したことが報告された。両名誉教授は受賞の喜びなどを話し、大きな拍手を受けていた。またこの間に亡くなった鷹野健次、小久保昇治両名誉教授に哀悼の意を表した。

第6回総会・懇親会は令和2年6月13日、同ホテルで行われる。

2019 実り多き海洋実習

2019年度の海洋スポーツキャンプ実習が、9月9日(月)から9月13日(金)までの5日間にわたり、徳島県のYMC A阿南国際海洋センターで開講された。

121名の学生が参加、ローピング講習から始まり、カヌー、カヤック、ヨット、ボードセーリング、SUP、そして無人島の野ノ島トリップなどの実習を、夜の講習と昼の実技に分けてグループ単位で行った。

初日は晴天だったが、残念ながら2日目と3日目は微風、一転して4日目は強風に高波という海洋スポーツには適さない天候の中の実技講習となった。海洋スポーツの体験は初めての学生も多く、初日はおぼつかなくしたが、自然の厳しさと悪戦苦闘しつつも、指導する教員やYMC Aスタッフからのアドバイスの下、グループメンバーとコミュニケーションを取りながら真剣に実技講習に取り組む、次第に海洋スポーツの楽しさを感じていく様子が見られた。

4日目の夜のキャンプファイヤーでは、グループごとに準備した工夫を凝らした寸劇を披露し、実習の成果を発揮する最終日の海洋スポーツ競技会では各グループが団結して競い合った。

「知らない学生と同じ班になったが、仲良くなれた。日に日に絆が深まっていくのが実感できた」悪天候という苦しい状況の中で、全員で舟を漕ぐことがチームを一つにした「カヌーもカヤックも初めてで海に対する恐怖心や不安などがあつたが、実際に体験してみると徐々に要領を得ていき、楽しく感じるようになった」という学生たちの感想の通り、5日間の海洋スポーツキャンプ実習において、実技スキルの習得のみならず、自然環境の厳しさと楽しさを知り、友情を育みチームワークを築いた体験を、今後の学生生活においても生かしてほしい。

【実習副主任 体育学部准教授 徳山友一】



ヨット、だんだん操縦に慣れてきました。風を感じて気持ちいい!

カヤック、陸上での講習を終え、沖合に向けてGO!



キャンプ実習 —2年生の実習Aを振り返って— 自然が教えてくれること



2年生を対象としたキャンプ実習Aは112名が参加し、8月26日から30日の4泊5日の日程で兵庫県美方郡にある尼崎市立美方高原自然の家にて行われました。昨年までは5月に実施していましたが、今年度より夏季開催となったことから、シャワークライミングをプログラムに取り入れ、登山、ASE(課題解決型プログラム)、ロゲイニング、焼き板作りの5つのプログラムでのローテーションで行われました。初日を除いて雨が降り続き、シャワークライミングの水量は日に日に増すばかり。体大生でなければ実施しないほどの激流で、普段スポーツで鍛えた身体や精神が試されるプログラムとなりました。シャワークライミングや登山は途中で諦めようにも誰も助けられないので最後まで行くしかありません。その時に対峙するのは自分自身です。どのような気もち方をするか、



激流のシャワークライミング

どのような仲間をサポートを求めるか……そして、どのような自分でいたいのか。自分の有り様が問われます。実習生は、前半はなかなかスィッチが入らなかったものの、悪天候の中、班で食事を作って一緒に食べ、同じテントで生活をしようという関係性が深まり、実習全体も雰囲気は良くなりました。最後の夜のキャンプファイヤーは、本学の野外活動実習を長い間牽引され、今年で定年を迎える福田芳則先生に営火長をしていただきました。それまで降り続いた雨が止み、満天の星空の下で火を囲み、最後は全員で肩を組んで歌を歌い、みんなの気持ちが一つになりました。日常生活とは異なる野外活動実習で得た気づきや学びを今後の大学生活に活かしてくれることを切に願います。

【キャンプ実習A副主任 伊原久美子】

大阪体育大学 平成30年度 資金収支計算書

収入の部		(単位：円)
科 目	金 額	
学生生徒等納付金収入	3,448,446,032	
手数料収入	63,996,280	
寄付金収入	19,524,000	
補助金収入	261,256,610	
国庫補助金収入	260,853,000	
府県補助金収入	403,610	
資産売却収入	777,600	
付随事業・収益事業収入	60,518,318	
受取利息・配当金収入	11,538	
雑収入	32,772,364	
計	3,887,302,742	

支出の部		(単位：円)
科 目	金 額	
人件費支出	1,774,238,050	
教育研究経費支出	866,025,005	
管理経費支出	249,478,554	
施設関係支出	66,561,148	
設備関係支出	202,047,455	
計	3,158,350,212	

大阪体育大学 令和元年度 資金収支予算書

収入の部		(単位：円)
科 目	金 額	
学生生徒等納付金収入	3,548,990,000	
手数料収入	63,710,000	
寄付金収入	18,900,000	
補助金収入	261,250,000	
国庫補助金収入	260,850,000	
府県補助金収入	400,000	
資産売却収入	0	
付随事業・収益事業収入	29,670,000	
受取利息・配当金収入	10,000	
雑収入	40,780,000	
計	3,963,310,000	

支出の部		(単位：円)
科 目	金 額	
人件費支出	1,883,130,000	
教育研究経費支出	994,570,000	
管理経費支出	249,570,000	
施設関係支出	80,910,000	
設備関係支出	241,660,000	
計	3,449,840,000	

趣向を
新たに

オープン キャンパス



今年度も高校生、保護者対象のオープンキャンパスが開催された。6月30日(日)には、保護者を対象に開催し、大学を取り巻く環境の変化や、大学進学における注意点、入試説明、キャリア説明、キャンパスツアー、個別相談を実施。また、今春リニューアルした学生食堂で、普段学生たちが食べているアスリートメニューの無料試食プログラムを提供した。

高校生向けには夏休みに合わせて7月21日(日)、8月3日(土)、8月10日(土)に開催。8月10日は、今年の新たな取り組みである「TADAI SPORTS & EDUCATION LAB 2019」を実施した。入学後の学びをリアルに体験してもらうための参加型のイベント形式で、第6体育館3階アリーナに、体育学部6コース、教育学部2コース、大学院のブースを設置。教員や学生に積極的に質問する参加者が多く見られ、ブース内のミニ講義は受講者で満席となった。体育館中央のメインステージでは、「理想の進路とは」と題して株式会社マイナビによる講義や、体育学部と教育学部の模擬授業を行った。

当日は株J・comのTVクルーによる撮影も行われた。部活動で活躍したことなどを想定したヒーローインタビューに挑戦するコーナーでは、高校生のユニークなパフォーマンスで大いに盛り上がった。体育大学らしいプログラムとしては、本学の安田昌玄・S&Cデイレクターの指導で行われた「トレーニング体験」があり、参加者は最新マシンの使用を体験した。本学を志望する多くの高校生が関心を持っているクラブ活動については、練習見学のほか、相談コーナーを設置して各クラブの代表者が対応した。今回のようなL A B型オープンキャンパスの取り組みで、「スポーツ科学を支える人材の育成」「体育・スポーツを通して児童・生徒の育成に寄与できる教員の育成」

への貢献をアピールし、高校生から選ばれる大学になることを期待したい。

多くの高校生やその同伴者に参加いただいたオープンキャンパスは、一般入試のための「入試対策講座」を12月8日(日)に開催し、今年度の予定を終了する。

【入試・広報部 松岡祐子】



◆◆思いがけないご縁があった、今春からOUHSジャーナル編集長

になりました。皆様よろしくお願ひ致します。この半年、取材活動の大半はスポーツでしたが、私自身はひどい運動オンチで、子供の頃は体育の授業に大変苦労しました。小学生の時に逆立ちの練習をしていて、鎖骨を折ったこともあるんです！……◆◆生来の運動神経の悪さに加え、近年は加齢による体力の衰えを痛感する日々。こんな私に体育大学の仕事が務まるだろうかと不安もありましたが、教職員の皆様に支えていただき、218号を無事発行することができました◆◆競技大会で学生たちが泣いたり笑ったりする様子は青春そのもので、こちらまで若返った気分になります。著大なアスリートや指導者の生の話が聞けるというのも体育大学ならではの経験であり、未知の世界だった学生スポーツについて「分かっていく」ことが体が面白かったこの数年でした。この新鮮な気持ちを忘れずに、OUHSジャーナルの編集を続けていければと思います。

【和泉かよ子】



極める力。

人を学び、育て、支える。

大阪体育大学

【大学院】

- スポーツ科学研究科
博士（前期・後期）課程

【体育学部】

- スポーツ教育学科
- 健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】

- 教育学科

大学事務局

庶務部、教学部、入試・広報部
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設

図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター

支援組織

教養教育センター、キャリア支援センター
教職支援センター、学習支援室
学生相談室・カウンセリングルーム

<https://www.ouhs.jp>